

# GLOBAL EDGE

[グローバルエッジ]

SOCIAL COMMUNITY MAGAZINE  
2020 AUTUMN No. 63

GLOBAL EDGE

**J-POWER**

No.63 2020 AUTUMN

特集 **挑戦** できる風土と挑戦する気概

HOME  
of J-POWER

藤岡陽子「ともしび食堂、本日閉店」  
短編小説



## 四国最東端に立つ白亜の灯台

徳島県阿南市にある蒲生田岬<sup>かもだみさき</sup>は、四国の最東端にあり、四国でもっとも早く朝日が昇るため、毎年元旦には暗いうちから混雑する“初日の出”スポットだ。そんな蒲生田岬にあるのが1924年（大正13年）に建てられた灯台。海拔49.6mに立つ灯台までは急勾配の階段を登る。この蒲生田岬灯台と和歌山県の紀伊日ノ御崎灯台を結んだ線が瀬戸内海と太平洋の境界と定義されており、瀬戸内海と太平洋を同時に見ることができる。

(P.22から作家・藤岡陽子さんによる阿南市を舞台にした短編小説を掲載しています)

文 / 豊岡 昭彦

写真 / 竹本Rika Rika Takemoto

風景写真家。千葉県生まれ。2007年、写真家・高橋よしてる氏に師事し、その後独立。日本各地の風景を撮影し、その作品は多くの書籍、雑誌、旅行パンフレット、カレンダーなどに採用されている。埼玉県見沼田んぼ近くに在住。 <http://takemotorika.com/>

## 特集 挑戦できる風土と挑戦する気概

Global Vision 小澤 守 × 渡部 肇史  
気候変動問題を解決に導くソリューションとは 06

Opinion File 下郡 けい  
地球温暖化をくい止める電気のつくり方 14

Opinion File 北野 華子  
スポーツの力で長期療養児に青春を 18

Focus On Scene 四国最東端に立つ白亜の灯台 02

Global Headline 寺島 実郎  
ポスト・コロナの時代 社会のデジタル化がもたらす光と影 05

Home of J-POWER 藤岡 陽子  
短編小説 ともしび食堂、本日閉店 22

海外コンサルティングヒストリー ベトナム社会主義共和国  
ベトナム国の経済成長を支えた石炭火力発電所建設 30

POWER PEOPLE  
電源開発送変電ネットワーク株式会社 32

Venus Talk スパイスカレー研究者 印度カリー子 34

匠の新世紀 有限会社ファッションしらいし 35

Power of Words 私の好きな言葉  
小説家 伊藤 朱里 39

「音のソノリティ」を詠む 歌人 小島 なお  
大水車の音風景 40

J-POWER NEWS 41

お松大権現は、通称「猫神さま」として知られ、境内には1万を超える招き猫が奉納されている(徳島県阿南市)。

表紙イラスト: 鯉江 光二  
本文デザイン: 田村 嘉章、中川 まり、渡辺 美岐  
制作協力: Weber Shandwick (ウェーバー・シャンドウィック)



コロナ禍によって大きなダメージを受けた日本の産業がこれから進むべき方向について議論すると、必ず登場するのが「DX(デジタル・トランスフォーメーション)」だ。DXとは、デジタル技術を社会や生活の様々な場面に活用することで効率化を進め、新たなサービスやビジネスモデルを生み出すことだ。

コロナ禍の中でデジタルサービスといえば、テレワークが代表例で、経験者からは「テレワークでも十分仕事ができる」「もう会社にはできるだけ行きたくない」という声も聞こえてくる。だが、本当にそうだろうか。

テレワークは、上司と部下などのタテのコミュニケーションには優れているが、組織を横断して新しいビジネスモデルをクリエイトするようなヨコのコミュニケーションには適さない。テレワークでは、来週の仕事をこなすことはできても、将来に向け会社全体を俯瞰し、会社の戦略や将来像を描くことは難しい。

加えて、テレワークが常態化したことで通勤定期券代の支給を廃止する企業が増えていることにも危惧を覚える。通勤定期は会社への行き来だけに使用するものではなく、休日のプライベートの活動にも使用されるもので、こうした遊びや余白の中にこそ、新しい発想や気づきが含まれていることを忘れてはならない。

DXを進めることで様々な事柄の効率

化は可能だが、それによって失われるものも多いということを確認しておくことが重要だ。何度も言ってきたことだが、ネット検索はピンポイントに情報を得ることは便利だが、図書室などで様々な書籍や資料に触れて、情報をマイニングし、違いや関連性を探り、自分の頭の中に地道にノートをつけていくような作業から生まれる「考える力」や「全体知」を得ることはできない。

さらに、デジタル化が生み出す格差の拡大にも配慮する必要がある。テレワークをはじめとするデジタル化は、大企業の比較的所得の高いホワイトカラーでは可能だが、エッセンシャルワーカーといわれる運送業や販売業、医療・介護などの分野ではデジタル化が難しい。こうした人たちは社会にとって必要不可欠でありながら、新型コロナ感染のリスクが高い割には所得が低いのが現状であり、社会のデジタル化が進むことで、今以上に格差が拡大していく可能性がある。「生身の人間」というリアルに対する問題意識をデジタルで補完し支えるという明確な意思がなければ、DXは社会の逆行性や歪みをさらに拡大させるだろう。

これから本格化するDXの時代を前に、我々はもう一度、このデジタルの光と影について考え、リアルをしっかりと踏み固めた上で、進んでいきたい。

(2020年9月2日取材)

## Global Headline

ポスト・コロナの時代  
社会のデジタル化がもたらす光と影

## 寺島 実郎

てらしま・じつろう

一般財団法人日本総合研究所会長、多摩大学学長。1947年、北海道生まれ。早稲田大学大学院政治学研究所修士課程修了、三井物産株式会社入社。調査部、業務部を経て、ブルッキングス研究所(在ワシントンDC)に出向。その後、米国三井物産ワシントン事務所所長、三井物産戦略研究所所長、三井物産常務執行役員を歴任。主な著書に『日本再生の基軸 平成の晩鐘と令和の本質的課題』(2020年、岩波書店)、『戦後日本を生き残った代は何を残すべきか われらの持つべき視界と覚悟』(佐高信共著、2019年、河出書房新社)、『ジェロントロジー宣言―「知の再武装」で100歳人生を生き抜く』(2018年、NHK出版新書)など多数。メディア出演も多数。



**渡部 肇史**  
J-POWER 社長

**小澤 守**  
関西大学名誉教授

激甚災害、爆弾低気圧、ゲリラ豪雨……と  
荒ぶる気象用語に負けそうになる。  
気候変動の主因とされる温暖化をくい止めようと  
地球規模の対策が求められているのは周知の通り。  
身近な生活インフラである「電気」の世界で、実効性を伴って  
CO<sub>2</sub>削減を促すための道筋を、  
安全安心の伝道師に訊ねた。

# 気候変動問題を 解決に導く ソリューションとは



<b>1</b> 哲学 Philosophy	<b>0</b> 総記 General note
100 哲学	000 総記
110 哲学専攻	010 経営学
120 経済学部	020 経営、管理学
130 経済学	030 法学専攻
140 心理学	040 一般論文、読書会
150 倫理学	050 英文科行巻、年鑑
160 音楽	060 学会、関係、研究調査機関
170 美術	070 ショーケース、新聞
180 仏教	080 書籍、全集
190 ナビゲーター	

## 事実と技術に立脚した 議論に重きを置こう

**渡部** 本日は関西大学名誉教授の小澤先生と対談させていただくわけですが、コロナ禍ということでオンライン会議システムを使って対談させていただきます。Jパワーは電気事業者として常に多方面にわたる技術を開発し、それを駆使しています。昨今は全地球的な課題である気候変動問題に対応しうる先端的技術、あるいは有効なソリューション（解決策）の獲得に精魂を傾け、この難題に正面から対応していかなくてはと肝に銘じています。

**小澤** その点について私は、今年2月に参議院の「資源エネルギーに関する調査会」に参考人の一人として呼ばれ、国会議員の前で話をする機会がありました。その場で感じたのは、環境第一で手当たり次第にCO<sub>2</sub>を減らすという語り口は議員たちに受けがよいが、そうするためのエネルギーバランスはどうあるべきか、それを裏付ける技術的課題をいかに克服するかといった肝心の議論は見過ごされがちだということでした。事実と技術に立脚した議論に重きを置かない現状には私自身、大いに違和感があります。

## 日本の経済を維持し、 国民がちゃんと生活できて その上で環境対策に万全を。

**渡部** 2015年のCOP21（国連気候変動枠組条約第21回締約国会議）で決議された「パリ協定」では、日本は13年度比で30年に26%削減、50年に80%削減を目標に掲げていますけれども、小澤さんはこの目標設定をどのように評価しておられますか。

貢献できないし、やると公言した日本の面目も立たない。その目安になる数値ですが、だからといって、その達成のためなら国の政策が環境一辺倒で突き進んでよいという話にはなりません。電源構成でいえば、CO<sub>2</sub>を出さない再生可能エネルギーにシフトせよとか、でも原子力はイヤだとか、さらにCO<sub>2</sub>の排出量の多い石炭火力を減らせとか、事実と技

術の視点を欠いた議論に終始している、どんな目標にも到達しえないと思います。

**渡部** 国のエネルギー基本計画では、30年時点の日本の望ましい電源構成は「再生可能エネルギー22〜24%、原子力20〜22%、石炭火力26%、天然ガス火力27%、石油火力3%」を原案としています。これらの構成比が今後見直されることはあるにせよ、環境問題にのみ起因してエネルギーバランスが根底から覆るようであってはならないということでしょうか。

**小澤** 要はエネルギーバランスも電源構成も、ここに至るまでの事実の積み重ね、技術の発展や蓄積の延長

線上で成り立っているのです。観点を変えれば、日本の経済を維持し、国民がちゃんと生活できて、その上で環境対策に万全を期すということ、その成り立ちを見誤ってはならない。そうした複雑系の中からベストバランスを見つけ出す作業が容易なわけではなく、とても環境一辺倒の価値観では追いつかないでしょう。

## ベストバランスの探求と 議論の深化

**渡部** 小澤さんご自身は、ボイラーの安全性を長く研究してこられて、エネルギー産業の成り立ちや技術開発の現場にも精通されています。我々事業者が、電力の安定供給という社会的使命を果たしながら、地球温暖化防止に貢献していく道筋をどうつけるべきとお考えでしょうか。

**小澤** エネルギーバランスも電源構成も、個々の選択肢に過度に寄らず、トータルなシステムとして俯瞰して見ることが第一の要件です。需要の大半を賄っている輸入エネルギーと再生可能エネルギーなどの国産エネルギーを按分して、システム全体として信頼性が高く、CO<sub>2</sub>排出を極力抑制できるようにベストバランスを探り当てていく。そして、それを

かなえる第二の要件は多種多様な選択肢を用意し、どんな変化にも耐える柔軟な対応力を失わないことです。

**渡部** 少しでもベターな方向に導いていくようなバランスの取り方、そのための合意形成のプロセスも大切ということですね。

**小澤** そういう冷静かつ粘り強い議論が、今はこの国に必要なと思います。

す。CO<sub>2</sub>削減問題がクローズアップされると、再生可能エネルギー礼賛の合唱が起きたり、CO<sub>2</sub>排出量の多い石炭火力はフェードアウトだと槍玉にあげたりする。仮に再生可能エネルギーで電源の数十%を賄うとして、そのとき生じる電力供給の不安定さをどの電源でバックアップするのかといった議論までは、まず踏み込みませんね。

## バランスの取り方や 合意形成へのプロセスを 大切にすべきなのです。

**渡部** 的を射たご指摘と思います。メディアなどの取り上げ方にしても、ある国が大胆な再生可能エネルギーシフトに踏み切ったと見出しを躍らせても、電源としての信頼性低下や電気料金の値上げといった副作用にまで言及することは少ない印象です。

**小澤** 昨今かまびすしい「石炭への逆風」も、客観性に欠けると言わざるをえません。先ほど示していた「30年時点の電源構成」で全体の26%を占める石炭火力を、いったい何に置き換えようというのか。CO<sub>2</sub>抑制を踏まえて石炭火力に代替可能なベースロード電源といえは、現実的には原子力しか見当たりませ



小澤 守(おざわかまもる)  
関西大学名誉教授。関西大学社会安全研究センター主任研究員。工学博士。1972年、神戸大学工学部機械工学科卒業、1977年大阪大学大学院工学研究科機械工学専攻博士課程修了(工学博士)。1979年以降、神戸大学工学部生産機械工学科助手・助教授、ドイツのアレキサンダー・フォン・フンボルト財団奨学研究員、関西大学工学部機械工学科助教授、関西大学社会安全学部安全マネジメント学科教授などを歴任し、2020年4月から現職。専門は工学的製品・システムの安全性、プラントの安全。関西電力「原子力安全検証委員会」社外委員。著作に『エネルギー変換論入門』(共著、2013年、コロナ社)など。

Global  
Vision  
Ozawa Mamoru  
Watanabe Toshifumi



技術は手順を踏んで  
それまでの実績に  
積み上がっていきます。

Global  
Vision  
Ozawa Mamoru  
Watanabe Toshifumi

バイオマスなどの再生可能エネルギーや原子力の分野にも取り組んできました。電源構成として間口が広く、選択肢を多く有している点、そして60年余に及ぶ実績の積み上げ、技術の進展と蓄積、研究・技術の系譜などが当社のベースにあります。  
**小澤** そこがとても重要です。エネルギー分野のイノベーションは、新しい技術が登場しても、従前のものにすぐに取って代わることはありません。古い話で恐縮ですが、蒸気動力の歴史を振り返ると、1712年に英国のトーマス・ニューコメンが大気圧のもとで稼働する蒸気機関（大気圧機関）を開発し、その数十年後にジェームズ・ワットが大気圧機関に新規技術を導入して現在につながる蒸気動力の発展の礎を築いた。需要家たちは当然、性能に勝る後発のワット型に雪崩を打ったかと思いきや、1800年時点の普及率はニューコメン型が8〜9割で、ワット型は1割程度。技術は手順を踏んで、それまでの実績に積み上がっていくことの証左だと思います。

を極限まで高め、同時にCO<sub>2</sub>排出も極力抑制する、いわゆる「クリーンコールテクノロジー」の研鑽に40年以上も心血を注いでいます。ただ漫然と石炭火力を使い続けるのではなく、高効率化・ゼロエミッション化に資する技術を取り入れた次世代型石炭火力への転換、新陳代謝が必要と考えるからです。  
**小澤** そうした技術開発の現場をよく知る一人として私が証言しますが、と真剣に自信を持って推進すべきと思っています。  
**渡部** まさに我々が長年意図してきた点です。引き続き、日本の高い技術の移転を通じて、途上国などの温室効果ガスの実効的な削減に寄与していきたいと考えています。  
**小澤** 石炭火力への逆風は強まる一方ですが、「重要なのは電力安定供給の担保。その上で地球温暖化防止に貢献しうる新しいシステムに順次切

当社は、クリーンコール  
テクノロジーの研鑽に  
40年以上も心血を注いでいます。

日本の石炭火力発電の技術は、世界的に見ても最高水準にあり、中でも超々臨界圧（USC）プラントや先進超々臨界圧（A-USC）プラントに関する技術は他の追随を許しません。それらを国内の石炭火力の高効率化・ゼロエミッション化への礎とするにとどまらず、石炭火力が主力電源であるような海外の多くの国や地域に日本の高い技術を移転する形で国際貢献していくことを、もつ

らが、原子力発電プラントの再稼働が遅々として進まない現状からして、今から10年後に石炭火力の穴を埋めるどころか、原案の「原子力20〜22%」の達成も難しいでしょう。国のエネルギー供給が逼迫する中で、いかにして日本のエネルギーの活路を見いだしていくのか。政官財を挙げて、今こそトータルなシステムの再構築に向けた議論を深めるべき時だと思っています。

### 電力安定供給を前提に 温暖化防止に貢献

**渡部** もう少し技術の話を持ち下げるのですが、その中核に位置するのが「石炭ガス化技術」です。かつて小澤さんには、当社の若松研究所で石炭ガス化複合発電（IGCC、※1）の「EAGLE」プラントを視察していただきましたが、技術はさらに相当先へ進んでいます。

**小澤** 私は北九州市の現地であれを見て、これこそ「極み技術」と呼ぶにふさわしいと直感しました。標準的な微粉炭火力では石炭を砕いた微粉炭をボイラーで燃やし、蒸気タービンを通して電気を起こすのに対して、石炭ガス化複合発電ではガス化した石炭ガスを燃料にして、ガスタービンと蒸気タービンを両方回すことで、発電効率を引き上げ、それによってCO<sub>2</sub>排出の低減を達成するという斬新さです。現物を前にして説明を聞きながら「これだ」とひざを打ちました。  
**渡部** その先には、IGCCに燃料電池を付け足してトリプル複合発電を行い、究極的な高効率化とCO<sub>2</sub>削減を目指す石炭ガス化燃料電池複合発電（IGFC、※2）の出番も控えています。IGFCの研究開発は舞台を広島県の大崎上島に移し、当社と中国電力株式会社との共同出資

### Keyword

- ※1 石炭ガス化複合発電  
Integrated coal Gasification Combined Cycle。石炭をガス化炉でガス化してガスタービンを回し、排熱で蒸気タービンを回すことで効率を高めた発電システム。
- ※2 石炭ガス化燃料電池複合発電  
Integrated coal Gasification Fuel Cell combined cycle。石炭ガス化複合発電（IGCC）に燃料電池を組み合わせてさらに効率を高めた発電方式。



先人から課題を受け継ぎ、  
自分で1歩でも進めて、  
後世の人に託せばよいと。

事業である「大崎クールジェンプロジェクト」に引き継がれて、今まさにプラント実装に向けた実証試験に着手しています。ぜひ現地をご覧ください。

ただそれだけではなく、これからプロジェクトの第2段階で、基礎技術のIGCCにCO<sub>2</sub>分離回収設備を付設する「CO<sub>2</sub>分離・回収型酸素吹IGCC」の実証試験が佳境を迎えているところです。

**小澤** それはぜひ拝見したいですね。石炭ガス化技術がもたらす二重、三重の高効率化でCO<sub>2</sub>排出を抑えるのと並行して、石炭ガス中の炭素成分を分離回収することで、直接的にCO<sub>2</sub>を減らすという前途有望な石炭利用技術であり、その成果には世界が注目していると思います。

**渡部** 発電プラントから回収したCO<sub>2</sub>を地中に安定的に貯留する技術(CCS)や、回収・貯留したCO<sub>2</sub>を食品製造や植物育成などにリサイクルする技術(CCU)なども今後の検討課題です。また、石炭ガス化技術を用いて褐炭水素を製造する技術・ノウハウも獲得して、来るべき水素社会の実現に寄与する国際的な取り組みへの参画も決めました。

それでもCO<sub>2</sub>は出ないなど環境面の優位性が大きいですから、将来的には、化石燃料に代わってエネルギーバランスの一翼を担う可能性もあります。

**人を大事にする風土が  
技術の伝承を円滑にする**

**渡部** 今日のお話の中で、新しい技術は従前からの技術を駆逐せず、その上に積み重なるというご指摘が胸に響きました。だからこそ時間をかけて技術を育て上げ、磨きをかけ続けることが大切なのだ……それは

「技術的達成をないがしろにし、  
技術の系譜が絶たれるなら  
もはや国富の損失です。」



究極の高効率発電技術IGFCの完成をめざす大崎クールジェンプロジェクト。



若松研究所のEAGLEプロジェクトでは、基礎技術のIGCCに磨きをかけた。

人財も同じではないかと感じました。

**小澤** まったくその通りで、技術はすぐに育たないし、技術者を育てるにも長い年月を要します。どんな技術分野であれ、試行錯誤を繰り返して成果を積み上げ、幾多のブレイクスルーを果たして、おのおの地歩を固めてきたはずで。そういう限

りない挑戦の上に築かれた技術的達成が、まっとうな議論も経ないでないがしろにされたり、技術の系譜が絶たれたりすれば、もはや国富の損失といつてよいでしょう。

**渡部** そうした挑戦ができる風土を醸成し、挑戦する気概を持つてもらうには、何が必要でしょうか。

**小澤** 失敗を許すこと。そして何を、どう間違えたかの検証をきっちり行うこと。そういう社風や制度が根づいていれば、何事にも余裕を持って挑んでいけますし、それが企業のレジリエンス、すなわち、しなやかな強さや復元力につながるのだと思います。

Global  
Vision  
Ozawa Mamoru ×  
Watanabe Toshifumi

**渡部** 私もあることに、失敗していいのだと言っているつもりですが、さらにアクセルを踏み込む必要があるかもしれませんね。

**小澤** 私が専門とする蒸気動力には300年余の歴史がありますが、IGCCやIGFCがその最新の進化形と言えなくもない。Jパワーのエンジニアが各現場で向き合っている課題解決への意気込みや確信が、もしかしたらニューコメンやワットのような先賢たちと地続きかもしれないと思いを馳せたら、挑戦する勇氣が体の奥から湧いてこないでしょうか。

**渡部** 先人から受け継いだ技術課題を、自分が1歩でも2歩でも前に進めて、あとは後世の人に託せばよい。そういう視座を持つと、何となく心が静まり、変な気負いも消えて、何事もうまく運ぶような気がしてきます。

**小澤** そうです。技術は、紙に書かれたものでは伝わらず、人によって伝わる。だから人財を大事にする風土を持った組織ほど、技術の伝承もスムーズに運ぶのが道理です。

**渡部** そういう人育て、技術の磨き上げに私自身も挑戦いたします。

**小澤** 成果を楽しみにしています。



# 地球温暖化をくい止める 電気のつくり方



下郡 けい  
一般財団法人日本エネルギー経済研究所  
戦略研究ユニット国際情勢分析  
第1グループ主任研究員

## 異常気象で思い知る 「パリ協定」の重み

「人間が増やしてしまったCO<sub>2</sub>を、自ら減らす。地球温暖化をくい止める方法を、私たちはそれ以外に知りません」

一般財団法人日本エネルギー経済研究所で欧州など各国のエネルギー政策を研究する下郡けいさんは開口一番、そう断言された。まさに名言。お訊ねしたい旨の半ばは回答を得たようなのだが、残りの半分、CO<sub>2</sub>を減らしながら電力需要を満たす「電気のつくり方」はやはり一筋縄ではいかないらしい。「昨今の異常気象に鑑みて温暖化対策が急務であることが広く認識されてきました。人類が気候変動問題に対峙し、身を切るようにして対策を講じてきても、未だ決め手に欠けたままです。そうではあっても、これまで私たちがたどってきたCO<sub>2</sub>削減への試行錯誤の

プロセス、あくなき挑戦の一部始終の中にしか、解決策は見いだせないと思います」この命題には秘策も奇策もない。自分たちが現に積み上げてきた対応策を一覧し、解決への糸口をたどる「補助線」を何本も引いてみるような、手探りの作業が必要なのだろう。

1本目の補助線は、気候変動問題への国際社会の取り組み。振り返れば1992年、リオデジャネイロでの「地球サミット」(※1)における気候変動枠組条約の採択。97年、第3回気候変動枠組条約締約国会議(COP3)での「京都議定書」(※2)採択。そして2015年、COP21での「パリ協定」(※3)採択がエポックメイキングな成果として思い起こされる。

「地球サミットでは、温室効果ガスの気候変動への悪影響防止が各国首脳間で初めて議論され、京都議定書には、先進国間の温室効果ガス削減目標(90年比で5%減)が盛り込ま

れました。それが18年後のパリ協定を経て本流と化すのですが、この流れを勢いづけたのが、温暖化に関する科学的知見の評価を提供する学術機関、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の報告書です」

88年設立のIPCCは、毎年開かれるCOPの議論などが各国政府の思惑に左右されぬよう、中立性や公平性を担保する役割を担う。07年に発表した第4次評価報告書(AR4)では、温暖化の要因が人間の活動である可能

性は「90%以上」と根拠をあげて示し、各国の環境対策を促した功績によってノーベル平和賞を受賞したほどだ。「IPCCは続くAR5で、人為起源の温暖化の可能性が『極めて高い(95%以上)』と表現して、COP21で20年以降の温室効果ガス排出削減の国際枠組みが採択される呼び水になりました。このパリ協定の締約国は195カ国に及び、世界の温室効果ガス排出規模の9割近く(88%)を占めた点が非常に画期的です」

では、COP21の席上、日本はどのような目標を掲げて、温室効果ガス排出削減に取り組む姿勢をアピールしたのか。いわば国際社会に対する「約束」の履行を含めて、気候変動問題への個別具体的な貢献を追ってみることが、2本目の補助線となりそうだ。

## CO<sub>2</sub>26%削減の約束は果たせるか

「日本政府は、30年度に温室効果ガス排出量を13年度比で26%減らすという約束草案を提出しました。また、長期的には50年にできるだけ近い時期に脱CO<sub>2</sub>社会を実現できるよう努力するとしています。その実現に向けて、国内の電源構成のバランスを見直し、産業・民生を通じて省エネ対策を進めるといった施策を示しました」

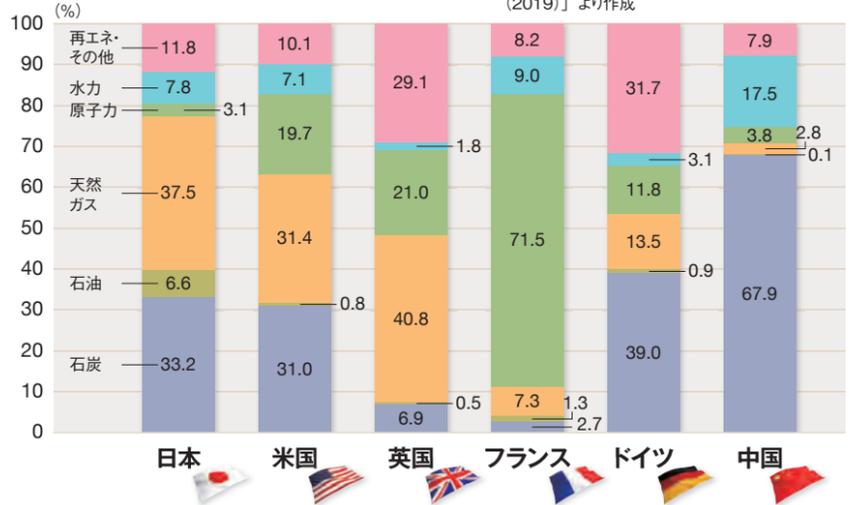
こうした数値目標や年限は各国が自己申告し、その後は5年刻みで達成状況を確認かめ、

次の進捗も見通す。日本が13年度を基準にしたのは、東日本大震災の発災以降に原子力発電所が停止し、電力不足を補うために火力発電所の稼働率が向上した結果、CO<sub>2</sub>排出量が急増。同年度のCO<sub>2</sub>総排出量が過去最大になった事実と密にリンクしている。「日本の目標設定は低過ぎないかと諸外国から指摘されることもあります。しかし、13年基準に直して比べると日本は26%減、米国18%21%減、EU全体で24%減となり、決してひげをとるものではありません。注目すべきは、この30年度の数値目標は国の掲げる『エネルギー基本計画』に依拠して算出されているので、その政策が実現されない限り、目標達成もおぼつかないことなのです」

エネルギー基本計画の成否を握るカギの1つが電源構成で、国の原案では30年時点の望ましい構成比は「再生可能エネルギー(再エネ)22%24%、原子力20%22%、石炭火力26%、天然ガス火力27%、石油火力3%」とされている。今から10年後にその状態になっていることを前提に「温室効果ガス排出量を26%削減」と申告したわけで、果たして日本はこの約束を果たせるのだろうか。

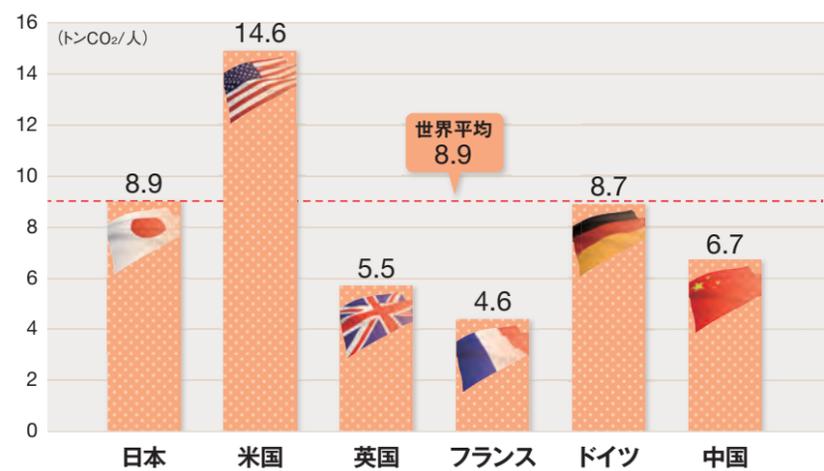
「それが容易でないことは率直に認めなければならぬでしょう。是が非でも地球温暖化をくい止めるという観点に立てば、自国の手札としてある多様な電源のうち、どんなカードを、どういう配分で組み合わせる時に副作用を抑えつつCO<sub>2</sub>排出削減を最大化できる

【主要国の電源構成】(2017年)



出典: IEA「WORLD ENERGY BALANCES (2019)」より作成

【主要国における一人あたりのCO<sub>2</sub>排出量】(2017年)



出典: IEA「Atlas of Energy (2019)」より作成

※1「地球サミット」  
正式名は、国連環境開発会議。気候変動枠組条約は、大気中の温室効果ガス濃度の安定化を最終的な目標とし、日本を含む155カ国が署名、1994年に発効した。

※2「京都議定書」  
正式名は、気候変動に関する国際連合枠組条約の京都議定書。京都市で開かれたCOP3で採択され、気候変動への国際的な取り組みを定める条約の先駆けとなった。

※3「パリ協定」  
パリで開かれたCOP21で、2020年以降の温室効果ガス排出削減等のための新たな国際枠組みとして採択され、195カ国が締結、翌2016年に発効した。



温暖化対策には身近な省エネ意識・行動も有効。冷房の設定温度を上げたらCO2を減らせるといった発想を持つ！

「S+3E」を4本目の補助線に
さて、図表の中でひとときわ
異彩を放っているのが「国別
の電力消費量割合」だろう。

そのようにして各国が固有のエネルギー事
情や抱える課題に基づいて「電気づくり方」
を編み出し、実践している。日本の場合、こ
の問題を考える際に「S+3E」という指標
がよく用いられる。安全性(Safety)を大前
提に、安定供給(Energy Security)、経済
性(Economy)、環境保全(Environmental
Conservation)を確保して考えることで、
より確かな結論に近接できるというわけだ。

※5 石炭火力と原子力からの脱却
産炭国のドイツで気候変動対策を促す根本的
な構造転換のため、2022年に脱原子力を、
2038年に脱石炭火力を目指すことを政府の肝
煎りで決定した。

エネ開発や原子力利用で厳しい目標に挑む姿
は、往年のジョンブル魂を彷彿させます」
EUの両輪であるフランスとドイツは何か
と対立軸も多いが、電源構成において真逆と
も言える志向性を有する点が興味深い。原子
力が国の基幹産業であるフランスは電源の7
割以上を原子力に委ねる一方、ドイツは90年
代まで電源の7割前後を占めた石炭火力と原

子力からの脱却(※5)を宣言したという。
「ドイツは、原子力を減らした分を石炭火力
で補ったためにCO2排出量が急増しました。
今は風力中心の再エネへの転換に懸命ですが、
ただ、そのためのコスト増が電力料金を押し
上げているのが悩みの種でしょう。またフラ
ンスで最近、原子力の電源構成比を5割に減
らす法案が通り、再エネ開発にも熱が入って
きているところです」

これを4本目の補助線に採用しない手はない。
「電源構成に当てはめれば、発電方法にそれ
ぞれメリットとデメリットがあり、どれか1
つで『S+3E』を満たすことなどできない
し、そもそも1つに絞る必要はないのです。
再エネ、原子力、石炭火力、天然ガス火力、
石油火力のどれもが完璧ではないと心得て、
多様な電源をバランス良く持つておくこと。
ひいてはそれがCO2排出量の削減につなが
り、地球温暖化対策にもなるのですから」
人間が増やしてしまったCO2を、自ら減
らす……冒頭の下郡さんの言葉が、リフレイ
ンして聞こえた気がした。

※4 気候変動法
2008年、英国が今後50年にわたる気候変動対策を規定した
世界初の法律。低炭素社会への移行促進と国際社会でのリーダ
ーシップ発揮が狙い。

諸外国の状況を
対照してみる

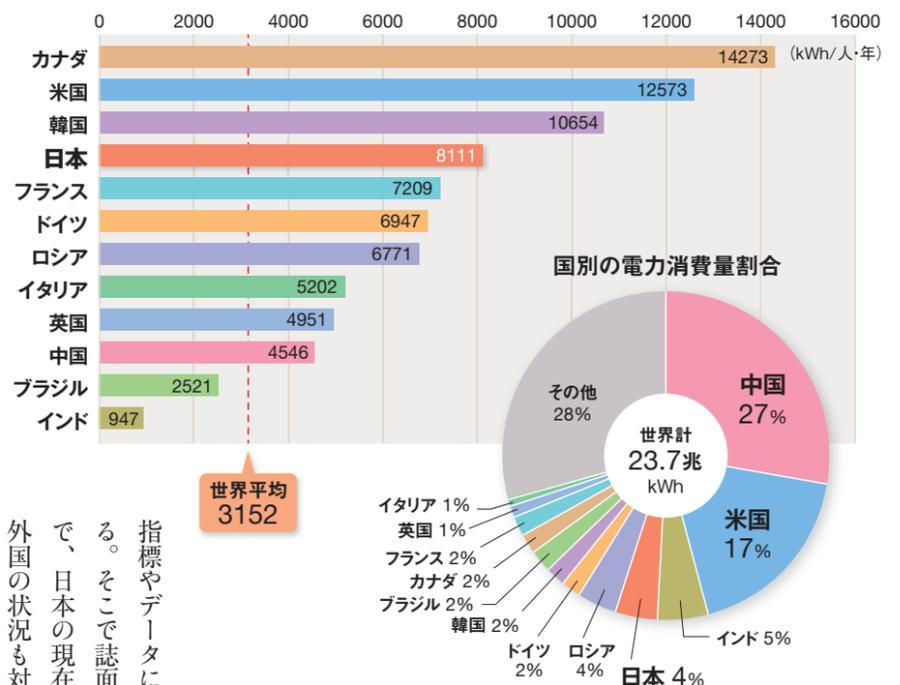
副作用を抑えながら最大限CO2を減らす
電源ミックスを考えるには、その根拠になる

「データにある日本以外の4カ国のうち、資
源大国の米国は電力消費量の多さに比例して
CO2排出量も抜きん出ています。電力料金
が格安なため消費に歯止めがかりにくい点、
パリ協定に国としてのCO2削減目標(26)

万事に突出する米国に比べると欧州勢はお
しなべて穏やかに見える。が、各国のエネル
ギー事情を背景とする電源構成の差異が鮮明
で、気候変動問題への対処などにも独自のポ
リシーで臨む傾向が見られるそうだ。
「英国は08年、世界に先駆けて気候変動法
(※4)を制定し、50年までに温室効果ガスを
90年比で80%減らす目標を掲げ、昨年さらに
実質ゼロ目標に改めました。化石燃料資源の
生産量が減少傾向にあり、洋上風力などの再

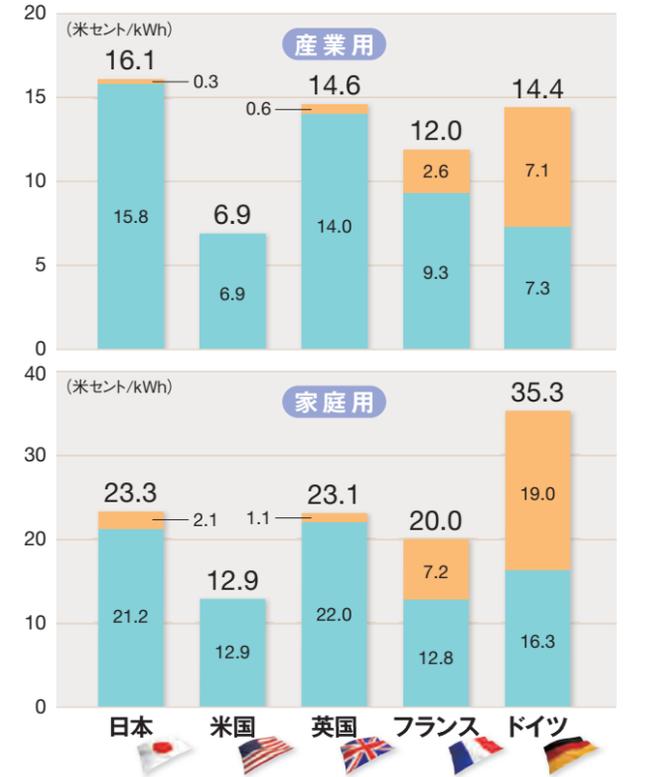
※5 石炭火力と原子力からの脱却
産炭国のドイツで気候変動対策を促す根本的
な構造転換のため、2022年に脱原子力を、
2038年に脱石炭火力を目指すことを政府の肝
煎りで決定した。

【主要国の一人あたりの電力消費量】(2017年)



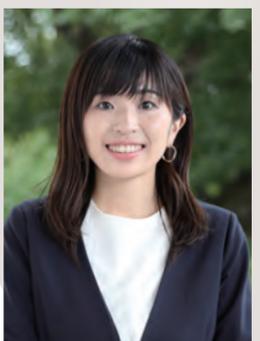
出典：IEA「Key world energy statistics (2019)」より作成

【電気料金の国際比較】(2018年)



出典：IEA「Energy Prices and Taxes 1st Quarter 2019」より作成

# スポーツの力で 長期療養児に青春を



**北野華子**  
特定非営利活動法人  
Being ALIVE Japan 理事長

## 子どもたちに「青春」を諦めさせないために

現在、日本には、長期療養児（※1）が約25万人いる。治療の期間は数カ月から十数年と様々で、中には退院後、元通り元気になって暮らしている子もいるが、入退院を繰り返しながら治療を続ける子も、自宅で療養しながら日常生活を送る子もいる。

こうした辛くて長い治療・入院生活を送っている子どもたちに「青春」を諦めさせない活動をしているのが、北野華子さんが理事長を務める特定非営利活動法人（NPO法人）Being ALIVE Japanだ。

「私自身、長期療養児でした。5歳のときに原因不明の難病を発症し、小学生の頃から入院を繰り返して、治療・療養期間は15年ほど続きました」

病気が治ったら、みんなと同じように学校

に行ける。みんなと同じように勉強して、高校や大学に進む。長期療養児は、病気を治してそんな当たり前の「青春」を送ることを目標に、様々な苦しみに立ち向かってがんばっている。

しかし、治療・療養が続く中、同世代のように学校行事やスポーツをしたり、友だちと遊んだりすることには、どうしても制限がかかってしまう。しかも、それが後どれくらい続くか、不透明な場合も多い。苦しい時期を乗り越え、いざ「青春」しようと思っても、就学期間が過ぎてしまい、学校生活やクラブ活動など、友だちや仲間と共有する貴重な時間は戻ってこない場合もある。

北野さんは自身の経験から、なかなかゴールが見えない長い生活を支え、前向きに生きるには、療養生活を送りながらも実現できる「青春」という活力が不可欠だと実感した。「治療しながらも実現できる『青春』をつく

り、病気のある子どもたちに仲間との経験や、将来の選択肢、可能性を増やしてあげたいと考えました」

その思いを実現するべく、北野さんは米国

に留学。米国の小児医療の現場では、療養中の子どもが主体的に医療体験に臨めるよう支援する活動が根付いていた。看護師とは別に「チャイルド・ライフ・スペシャリスト（※2）」

という資格を持つス

タッフが、療養中の子どもたちの生活を様々な形でサポートしていたのだ。北野さんに衝撃を与えたのは、病院で子どもたちがスポーツをしている現場だった。

北野さん自身も経験者だが、療養中の子どもは、まず運動や体を動かす遊びを制限されることが多い。体を動かす機会といえば、病棟の中を歩きまわること、短時間の散歩くらいだろう。病院でスポーツをするなんて、ありえないことだった。しかし、その様子を見ていたうちに、北野さんはスポーツの持つ力に気づいた。

## 【Being ALIVE Japanの活動】

入院治療中の  
こどもの  
スポーツ活動

長期療養児と  
きょうだいの  
スポーツ祭

長期療養児の  
スポーツチーム  
入団事業

「スポーツには、技やスピードを競うものというイメージがありますが、別の一面もあります。趣味として好きなスポーツを続けたり、観戦して応援したり、様々な楽しみ方があります。療養中の子どもたちも、スポーツをすることで、自立や日常生活に戻るための体力が向上したり、自分自身に自信をつけたり、人と関わることで社会性を育んだりできます。こういう活動をぜひ日本にも持ち帰りたいと思いました」

北野さんの胸の中に、病気の子どもの支援の一環として、スポーツという新たな切り口が見つかった。

## 病院でのスポーツ活動 そのスタートと経緯

北野さんが病院でのスポーツ活動を開始した2015年当時、日本の小児医療の現場には、難病で長期療養している子どもたちのスポーツ活動に関する情報はないに等しい状態だった。「なぜ、スポーツ？」と問われることも多かった。

しかし、北野さんは「激しい運動をするのではなく、仲間をつুক্তたり、仲間と一緒に体験したりするためのスポーツプログラムを提供したい」と訴えた。

「手や足が使えないから、体力が落ちているからと『できないこと』を見つけてはななく、子どもたち自身が『できること』を見つける機会をつくりたかったのです。やわらか



慶應義塾体育会野球部に入部した田村勇志選手（入団時11歳）。背番号6番を付け、神宮球場で行われた早慶戦の始球式に参加した。

※2 チャイルド・ライフ・スペシャリスト  
Child Life Specialist。療養中の子どもや家族に対して、心理社会的支援を提供する専門職。現在、日本の国家資格ではなく、米国ACLP（Association of Child Life Professionals）による認定資格。

※1 長期療養児  
小児がんや腎臓病など様々な病気で、長期的に治療・療養を必要とする子ども。



道具やルールを工夫することで、「できた！」が新たな意欲を育んでいく。



みんなでどうしたらできるかを考えることが成長につながる。



「長期療養の子どもたちに最高の子ども時代や『青春』を体験してもらいたい」と語る北野さん。

「子がいたり、医者や看護師さんとの会話が増えたりしたことだった。」「次回のスポーツ活動に参加したから、今週の治療をがんばる」「スポーツ活動日と重ならないように、検査日を調整してほしい」など、自らの治療に積極的になる子どもが続々と現れた。プログラムではプロ選手やオリンピック選手などに参加してもらった場合も多い。憧れの選手と一緒に歩いたり、プレイしたりする行動自体が、子どもたちにとって自発的なリハビリにつながるケースも多いという。

いボールを使う、全員が楽しめる動作やルールを決めるなど工夫すれば、病気の子どもにも『できること』はたくさんあります。そうして実現した初めての活動。緊張や戸惑いの雰囲気の中でスタートしたものの、最終的に子どもたちや家族に笑顔が広がったという。周囲が驚いたのは、楽しいひとときを過ごしただけでなく、「体を動かした後のご飯はおいしい」と、いつもより食欲が出たと

その話は家族や医療関係者、院内学級の先生などを通じて徐々に広がっていった(※3)。「現在、うちの病院でも実施できないか、どんなことに注意すべきかなど、小児科医の先生や院内学級の先生などからお問い合わせをいただいています。活動当初は、こんなに急速に広がるとは思ってもみませんでした」実施しているプログラムは、実に様々なバレーボールやサッカーなどのほか、最近

ラグビーなども取り入れている。病院に併設されている体育館を使用する場合もあるが、主に使うのは院内学級やプレイルーム、リハビリルームだ。安全にスポーツを楽しめるスペースかどうか、階下に音が響かないかなど、病院の実情に合わせて環境を整える。例えば、ラグビーの場合、試合を忠実に再現するのは難しいが、トライやパスといったラグビーならではのプレイを体験することはできるとい

もちろん、今年になってからは、感染症対策にも細心の注意を払っている。もともと長期療養児は感染症によるダメージが大きいことが多いため、小児医療の現場では、コロナ以前から感染症対策には敏感である。参加するアスリートにも事前に説明して予防注射を打ってもらい、感染症のチェックをしてきた。「アスリートの皆さんからは、子どもたちを励ますつもりが、むしろ自分のほうが元気をもらったという感想を多くいただいています。できれば、一回きりのボランティアではなく、継続した支援によってアスリートはその社会的価値を高め、多くの子どもたちもいい刺激を受けていく、そんな活動でありたいと思っています」

### 病院外でのスポーツ活動も拡大中

北野さんは、病院外での2つのスポーツ活動にも力を注いでいる。

その1つ目が、長期療養児と兄弟、友人と一緒に楽しむ地域のスポーツ活動(スポーツ祭)だ。せっかく入院中にスポーツの楽しさに目覚めても、自宅療養時にはなかなかその機会がないことも多い。また、長期療養児を抱える家庭では、どうしても親の気持ちからその子に集中しがちなため、兄弟は普段から様々な我慢を余儀なくされていることが多い。そうした家族のストレスを発散するためにも、家族や地域の人々が一緒になってスポーツでつながる場が望ましいと考えたのだ。

また、病院外での2つ目の活動として、病気が子が学生やプロスポーツのチームに入団し、練習や試合などの活動に参加する「TEAMMATES」というプログラムも展開している。長期療養児が大学生やプロスポーツのチームの一員として、一定期間一緒に活動するプログラムだ。「慶應義塾体育会野球部(慶應大学野球部)で活動した子もいますし、バスケットボールBLEAGUEの『川崎ブレイブサンダース』に入団した子もいます。こうした活動が前例となつて、同じ病気のある子がスポーツを始

めて、同じチームに入団した例もあります。スポーツは、多くの子どもの前向きな療養生活につながるのだと実感しました」北野さんが目指しているのは、ゼロから1をつくりだすこと。10年前には「病院でスポーツ」は当たり前ではなかったが、今は「新しい当たり前」として定着しつつある。「スポーツ活動を通じて『青春』を諦めなくてもいい、病気でも『できること』はある、とわかることで、今治療をがんばっている子どもたちも、先の未来を見られるような療養生活ができるでしょう。これからもスポーツを通じて、今までになかった新しい『当たり前』をつくり出していきたく思います」病気が闘っている子どもたちにとって、励みになるようなロールモデルをたくさん増やしていきたい。「『できること』は必ずある」という確固たる信念を抱く北野さんの奮闘は、留まることなく今日も続いている。

取材・文／ひだいますみ 写真／竹見倫吾 p.18、p.20  
それ以外はBeing ALIVE Japan 提供

きたのはない) 特定非営利活動法人Being ALIVE Japan 理事長。チャイルド・ライフ・スペシャリスト、セラピューティック・レクリエーションスペシャリスト。慶應義塾大学環境情報学部卒業、京都大学大学院医学研究科社会健康医学専攻を修了。米国に留学し、アトランタパラリンピックのレガシー団体「BlazeSports America」やシンシナティ小児医療センターでの実践を経て帰国。埼玉県立小児医療センターでチャイルド・ライフ・スペシャリストとして勤務しながら、入院中の子どもたちのスポーツ活動を展開。  
https://www.beingalivejapan.org/

※3 徐々に広がっていった 実施病院は国立成育医療研究センターほか7病院。スポーツ活動を提供した子どもの数608人、5年間のプログラム数131回、提供したスポーツの種類17種目、参加アスリート数62人(同法人「2015-2019年度事業報告書『5 Years Report』」より)

短編小説

## ともしび食堂、本日閉店

作家 藤岡陽子



徳島県阿南市にある橘湾火力発電所。

※コロナ禍で取材ができないため、今回は藤岡陽子さんによる短編小説を掲載します。  
写真：竹本りか（2019年1月発行の本誌56号の写真を再利用しています）

最後の客が帰ってしまおうと、店はとたんに静かになり、表を歩く人たちの話し声が店内にまで響いてきた。

「お母さん、おつかれさま」

ふう、とひと息ついたところに、カウンターの奥で洗い物をしていた由奈が声をかけてくる。

「ああ、おつかれ。由奈、手伝ってくれてありがとうね」

「ええよええよ、私も久しぶりに所員さんたちに会いたかったし。異動先からわざわざ来てくれる人もおったりして、ちょっと感激したわ」

今年で三十二歳になる娘の顔が、幼い頃のままにはころぶ。そういえば昔もこんなふうに店の手伝いをしてくれたっけ……。

今日は笑子が営んできた「ともしび食堂」の最後の営業日だった。阿南市の片隅で夫の親の代から四十年以上続いた店は、今宵をもって店じまいとなる。

夕方五時から始まったささやかなお別れ会には、発電所の所員さんたちが次々に参加してくれた。転動していった人たちも閉店の噂を聞きつけ顔を出してくれ、お別れ会は同窓会のような明るいものとなった。

◇ ◇ ◇

笑子の夫、忠津正道が心臓の病で亡くなったのは、いまからちょうど二十五年前の冬の日だった。四十二歳だった笑子は十歳の正輝と七歳の由奈、まだ小学生の子どもを二人抱え、途方に暮れた。結婚してから十年以上、ともしび食堂の厨房で料理を手伝っていたとはいえ経営のことはすべて夫に任せきりにしていたので、ひとりきりで店を切り盛りしようとは考えもしなかった。納骨をすませたら子どもたちを連れて実家に帰ろう。そう思っていた。

だがそんな笑子を、

「あんたがこの店続けなさい。亡くなった先代も正道ちゃん

も、きっとそれを望んどるよ」  
と近所に住んでいた夫の伯母が引き留めた。笑子にしても愛着のある店を手放すのは辛い。一軒家の二階は自分たち家族の住居になっていたの、店を失うことは家族四人で暮らした思い出の場所をも失うことになる。でもやっぱり店と子育てを両立する自信を持たずにはためらっていると、その伯母はこんなことも口にした。

「笑子さん、あんたも知つとるでしょう。来月から発電所の建設工事が始まるんよ。きっとこの町にも人が増える。お客さんだつて増えるはずや」  
この町に大きな火力発電所ができる、ついに建設工事が始まる。

それが町にとってなんの意味をもつのか。自分たちの暮らしにどんな影響があるのか。そんなことはさっぱりわからなかった。だが「発電所ができる」という言葉には笑子を前に向かせる響きがあった。

よし、ここに根を張って店を続けてみよう――。  
笑子がそう心を決めたのは、一九九五年、冬のことだった。

◇ ◇ ◇

「お母さん、もう暖簾下ろしてもええよね？」

洗い物を終えた由奈が、てきぱきと手を動かしている。その一方で笑子はさつきからぼんやりと店内を眺めていた。

「ねえお母さん聞こえてる？ あと十五分で閉店だから暖簾下ろすよ。それから、玄関先の電飾看板の電気も消すねー」

高校を卒業して看護師になった由奈は三年前に結婚し、いまは一歳になる双子の女の子を育てている。だがそろそろ職場に復帰するので、笑子に子育てを手伝ってほしいと頼んできた。店を閉める一番の理由は、徳島市内で暮らす娘一家と同居するからだだった。



阿南市は、LED 発祥の地として「光のまち阿南」をうたっている。

だがあちこちガタがきている自分の体を思えばちょっといい頃合いでの店じまいなのかもしれない。

「あ、暖簾下ろすのはちょっと待って。まだあとひとり来る予定やから」

「来る予定って、お客さんが？こんな時間から？」

「そう。仕事が終わりたい向かうって連絡もらったんよ」

誰が来るのか、とも聞かずに由奈が「了解」と頷き、

「これ、うちの家に持っていくよ」

と厨房の壁に飾っていた発電所の写真を指差した。

「持ってってええの？」

「ええよ。新居にはお母さんの部屋も用意してるんやから、そこに飾ればええし。大事なものでしょ？」

夫の伯母の予言通り、発電所の工事が始まってから、町に人が増えた。ありがたいことにもしび食堂の客も増え、常連の中には発電所の関係者がたくさんいた。発電所が運転を開始した八年後には四国最大級の野球場「JAアグリあなんスタジアム」も阿南市内にオープンし、町は活気づいていった。

「そういえばこの発電所の写真、家島さんがくれたんよ」

「そうや。あんた、よう覚えとるね」

家島は、発電所の建設工事が始まった時からの初代メンバーで、秋田出身の男性だった。あの頃はまだ二十代だったろうか。

「家島さん、たしかあの席で日本酒飲みながら、地元にいる彼女の話しとったね」

由奈が一番奥のカウンター席をちらりと見つめ、楽しそうに笑う。そういえば由奈は、夜になって寂しくなると店に出てきてはお客さんに相手をしてもらっていた。

「そうやね……この店が、いろんな人と出会わせてくれたね」

しみじみと口にする笑子のことをからかうかと思っただが、由奈は真面目な顔をして「ほんまや」と頷く。

「お母さん、このノートなに？」

厨房の隅に置いていたノートを、由奈が引っ張りだしてくる。

「いやだ、見んといてよ」

「ええやん、料理のレシピでしょ？どれどれ？おっ切り込み、白味噌の雑煮、ヒカド……って、なにこれ？うちのメニューじゃないよ」

「それは郷土料理や。おっ切り込みっていうのは群馬のうどん料理。白味噌は京都のお雑煮なんかに使うんよ。ヒカドは長崎でつくられる和風シチューのこと……」

「どうしてこんなレシピがあるの？うちの裏メニューなの？」

「裏っていうか……」

ノートに書いてある郷土料理は、発電所で働く所員さんたちの出身地のものであった。所員さんたちは異動が多い。短い人は赴任して一年や二年ですぐにまた転勤になることもある。全国を巡る所員さんたちに、彼らの郷土料理をつくって出したいと思ひ、始めたことだった。

「お母さん、きりたんぼまでつくってたの？」

飽きもせず楽しみにノートを繰っていた由奈が大きく目を開く。「きりたんぼ？そんな簡単や。すりこぎですり潰したご飯を、



JAアグリあなんスタジアムは徳島県所有の野球場。

「学校の社会科見学で発電所を訪ねて行った時、所員さんたちが『お、由奈ちゃん』って声かけてくれたんよ。なんかそういうの嬉しかった。お父さんが生きてたら、きつとおじさんたちみたいになんか一生懸命働いてたんやろなって思ったりもして」

職場で見る所員さんたちの姿はきりりとしてカッコ良かった、と由奈が笑う。

「発電所で働く人はみんなきりりとしたからね。それだけは二十五年間、ずっと変わらん……」

ボイラー建屋は阿南市の花、ひまわりの黄色。石炭バンカー建屋は徳島の名産である藍の青色。タービン建屋は特産物、すだちの緑色。鮮やかに彩られた美しい発電所は、運転開始からずっと変わらず、ここに在った。この二十五年の間に小学生だった子どもたちは成人し、笑子の顔には深いしわが刻まれた。だがメンテナンスと更新工事を繰り返し、最先端の技術をもって動き続ける発電所は、美しい姿のまま電気を供給し続けている。

あの発電所がこの場所で電気をつくっている間は、私もここでやっていたける。

夫がいなくなつてからの年月、笑子はそんな願掛けをしてきた。心のどこかで、発電所を同志のように感じてやってきたのだ。

棒に握りつけて焼くだけ」

「ああそっか。きりたんぼって、秋田の郷土料理やな。このメニューは家島さんのためやね。そういえば家島さんって、いまどうしてるんやろね」

「家島さんは正輝が高校を卒業した年に、ここを離れたんよ。沖縄の発電所に行かれたところまでは知ってるんやけど……」

「そうなんや。なんか懐かしい。会いたかったなあ」

笑子にしても、家島には最後にきちんと礼を言いたかった。だが所員さんの異動先まではさすがにわからない。

「家島さんといえば、お兄ちゃんの家出騒動やね」

由奈がさもおかしそうに笑う。

「そうやな。あれはほんとに大変やったわ」

何事もなく解決すれば、衝撃的な事件ほど最高の笑い話になる。二十年前に正輝が起こした「家出騒動」は、いまま家族の思い出話として繰り返し登場する笑い話だった。

◇ ◇ ◇

あれは正輝が中学三年生の、十月のことだった。

「あれ由奈。お兄ちゃんは？」

笑子が店の戸締りをしてから階段で二階に上っていくと、正輝の姿がどこにもなかった。

「え、知らんよ。自分の部屋か店におらんやと思ってた」

由奈がテレビを観ながら面倒くさそうに言ってくる。

「部屋は空っぽやけど。店にもおらんかったし……」

時計を見ると、もう十時半を回っていた。これまで一度だってこんな時間に外出したことなどなかったの、笑子の背筋が冷たくなる。

「お兄ちゃん、学校からまだ帰ってないんじゃないの。中学に電話してみたら？」

「学校に電話って……こんな時間やしな」

笑子は階段を駆け下り、店の玄関から外に出ると、そのまま裏に回った。思ったとおり、そこにあるはずの正輝の自転車がない。あの子、いったん家に帰って来て、またどこかに行ったんや……。海側から吹いてくる強い風に髪をなぶられながら、笑子は今日の放課後にあった三者面談のことを思い出していた。正輝の進路について担任と話したのだが、なんの前触れもなく「おれ、中学を出たら働きます」と口にした正輝を、「あんたはなにアホなこと言ってるのっ」と思いきり叱りつけてしまった。

不吉な予感に胸を冷たくしているところに、

「お母さん、電話っ」

由奈が家の中から飛び出してきた。靴下のまま、サンダルも履かずに家の裏まで駆けてくる。

「電話？ 誰から？」

動揺する由奈の様子から、正輝のことだとわかった。正輝の身になにか起こったのだ。

「家島さんから。家島さんが、お母さんいますかって」

踵を返し、笑子は家の中に走って戻った。思わず靴のまま店の奥から二階に続く階段を上がりそうになり、慌てて脱ぎ捨てる。

「もしもしっ、ともしびです。ともしび食堂の忠津ですっ」

思わず店の名前が口をつき、名字を言い直す。

「ああ、女将さん？」

予想に反してどこかのんびりした家島の声が受話器の向こう側から聞こえてくる。

「あの、ぼく、さつき正輝くんと……」

「正輝、正輝がどうしたんですかっ」

間髪いれずに訊き返すと、背後から腕を強く引っ張られた。振り返ると由奈が「お母さん落ち着いて」と言ってくる。

「じつはぼく、さつき正輝ちゃんと津峯山のふもとで会ったんですよ。ぼくがジョギングしている時にすれ違って。それがなんとなく……」

◇ ◇ ◇

十一時半回ったよ、さすがに暖簾下ろすよ、と由奈が言ってきた。ついでに外周りの掃除もしておくね、と箒を持って表に出て行く。「ありがとう」

その華奢な背中に声をかけながら、娘はすっかり大人になったのだなとしみじみ思う。正輝は三十五歳。由奈は三十二歳。そして自分分は六十七歳になった。

二十年前のあの夜、正輝は津峯神社で発見された。

息子を見つけてくれたのは家島で、彼の話によると、正輝は津峯山の山頂まで登ったものあまりに闇が深く、動けなくなっていたのだという。

車に乗せられて家に帰ってきた正輝を、笑子は叱らなかつた。どうして高校に行かないと言いつけたのか、その理由を電話で家島から聞いていたからだ。

「正輝くん、中学を卒業したらともしび食堂を継ぐつもりなんですよ。お父さんが亡くなる前に、将来は自分が店を継ぐと約束したからって。いま本人の口からそう聞きました」

正輝くんを無事に見つけました。そう電話で連絡を受けた時に、家島はそんなことを口にした。

「でもね、正輝くん、本当は船乗りになりたいらしいですよ。今日お母さんに怒られて、自分でもどうしたらいいかわからなかつたのかもしれないね」

男の子の家出なんて珍しいことではない。正輝くんにはこれまで反抗的ところがなかつたから、むしろ安心したと家島は電話口で笑っていた。

家出騒動の翌日、笑子は正輝と向き合って、将来について話し合った。それまでは店をやっていくことに必死で、息子と真剣な話をするのは初めてのことだった。

正輝は家島が言った通り、「船乗りになりたい」と重い口を開い

声をかけづらい雰囲気だったんです。それでなんか気になってしまつて、こうして電話しました。あの後、正輝くんがちゃんと家に戻ったかなと思つて……」

すれ違ったのは夜の八時くらいのことだと、家島が声を硬くする。笑子の慌てぶりからなにか感じとつたのだろう。家島の口調が慎重なものに変わっていた。

「正輝はまだ家に戻ってないんで……」

不安で胸が圧され、語尾が潰れた。進路相談の場で息子をききく詰ったことがまた頭の中に蘇る。

「あんた、なに言うてるの」「受験勉強から逃げたいだけでしょっ」

「お母さんの気持ちも知らないでっ」

先生を前に、きつい言葉を投げつけてしまった。

正輝はなにも言い返さず、ただうな垂れていた。

「女将さん、しっかりしてください。ぼく、いまからもう一度、津峯山に行ってみますよ。寮に車持ってるやつがいるんで、車で捜してみます。女将さんは警察に一報しておいてください」

警察、という言葉にうろたえる笑子を、家島が「大丈夫ですよ」と慰める。警察に世話になるようなことは方に一つもない。ただ万全の安全対策をとりただけだから、と。



津峯神社の参道入り口は山の8合目にある。



津峯神社は、標高284mの津峯山の山頂にある。

た。自分は大規模な発電所のそばで育ってきた。発電所の揚炭棧橋には外国からの石炭運搬船が入ってくる。その巨大な船を眺めていると、いつか自分も広い世界に飛び出していきたいと思うようになった……。長い時間をかけて、正輝は自分の思いをぼつりぼつりと打ち明けてくれた。

「お父さんとの約束を守れなくてごめんなさい」

そう口にした十五歳の息子を、笑子は泣きながら抱きしめた。店を継いでくれないことに落胆したのではない。夫と息子がそんな約束を交わしていたことすら知らなかつた。笑子が胸を熱くしたのは、息子が自分の夢を語れる人間に育ってくれたからだだった。

広い世界に飛び出していきたい――。

その後正輝は地元の高校に入学し、卒業後は愛媛県にある国立の海上技術短期大学校に進み、いまは海運会社で航海士として働いている。

◇ ◇ ◇

「きゃあー！」

表から由奈の叫び声が聞こえてきたので、「どうしたの」と顔をのぞかせると、正輝の姿が目の前にあつた。

「ああ正輝、遅かつたねえ。所員さんたち、もう帰っちゃつたよ」



橋湾火力発電所  
所在地：徳島県阿南市橋町小勝  
発電方式：火力発電（石炭）  
認可出力：210万kW（105万kW×2）  
運転開始：2000年7月（1号機）  
2000年12月（2号機）

1 橋湾火力発電所は、1995年に着工、2000年7月に運転を開始した。2 橋湾火力発電所の全景。3 排出ガスをクリーンにする集塵機。4 橋湾火力の発電機は日本有数の出力規模を誇る。5 発電所の周りには防潮堤が巡らされている。6 運搬船から石炭を降ろす揚炭場のアンローダー。7 石炭サイロは、7万トンの石炭を保管できる。

驚かすために由奈には内緒にしていたが、今日のお別れ会には正輝も顔を出すと聞いていたのだ。お世話になった所員さんたちに自分も挨拶をしたいから、帰船したらすぐに駆けつける、と。

「なんや由奈。そんなにびっくりした？ お兄ちゃんとはお盆に会ったとこやろ」

そんななおおげさな、と笑子が笑うと、「お、お母さん……。ほら、ほらあ！」と由奈が正輝の背後を指差した。そこで初めて、笑子は正輝の後ろに人が立っていることに気がついた。暗い闇にまぎれて気づかなかった。正輝の上司だろうか。

「ああ、これは失礼なことだ。正輝がいつもお世話になっております」

息子の後ろに立っていたのは恰幅の良いスーツ姿の男性で、笑子は深く腰を折って挨拶をした。その瞬間、

「女将さん」

闇の中から懐かしい声が聞こえた。

「女将さん、ぼくです。お久しぶりです」

男性が一步前に出て、正輝のすぐ隣に並ぶ。店の中から漏れる電灯と電飾看板の光が、男性の顔をほんのりと照らした。

「……家島……さん？」

目の前で、二十五年ぶん歳を重ねた家島が笑っていた。だが笑顔はあの頃のままで、笑子の声が震える。

「すみません、こんな遅い時間から。ともしび食堂のお別れ会のこと、今朝知ったんです。仕事終わってから来たもんだから……」

いまは広島にある火力発電所に勤務しているのだと家島が教えてくれる。その後、地元に残してきた彼女と結婚し、いまは二人の子どもの父親になったのだという。

「噂をすればやな、お母さん。さあさあ立ち話もなんだから中に入ってください。お刺身も津乃峰大吟醸もまだまだありますよ——」

胸がいっぱいでただ立ち尽くすだけの笑子に代わって、由奈が二



人を店の中に招き入れる。笑子は大きく深呼吸した後ようやく言葉をとり戻し、「あんたも一緒に飲みなさい」と由奈をカウンター席に座らせた。

「ともしび食堂に乾杯」

家島がグラスを持ち上げ、口にした。

「乾杯！ お母さん、長い間おつかれさまでした」

由奈がカウンターのの中に入ってきて、笑子にもグラスを持たせ、酒をついだ。店は客に飲んでもらう場所なので、自分がここで酒を口にするのは初めてだった。それも大吟醸。

込み上げてくるものを抑えきれず、でも涙を見られることが恥ずかしくて笑子はそっと視線を逸らす。三人に背を向けて、壁にかかる発電所の写真と向き合った。

（ここまで無事やってこられたのは、あなたのおかげです。本当にありがとうございます）

額縁の中で佇む発電所に向かって、笑子はそっと礼を伝えた。

家島を間に挟み、正輝と由奈が子どものようにはしゃいでいた。三人が語る昔々の思い出話を、笑子はほろ酔い気分で聴いていた。明るい笑い声が店内に響く。

いい人生だった、と笑子は心の中で呟いた。

そしてこれからも、いい人生が続くのだろう。

藤岡 陽子 ふじおか ようこ  
報知新聞社にスポーツ記者として勤務した後、タンザニアに留学。帰国後、看護師資格を取得。2009年「いつまでも白い羽根」で作家に。最新刊は10月26日発売の『きのこのオレンジ』。その他の著書に『手のひらの音符』『満天のゴール』など。京都府在住。本誌では、38号（2014年7月発行）より「Home of J-POWER」を執筆。

※この小説はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。



## ベトナム国の経済成長を支えた 石炭火力発電所建設

ギソン1火力発電所計画  
ベトナム社会主義共和国

# Socialist Republic of VIET NAM



ギソン1火力発電所

### ベトナム国での主なプロジェクト

- 1990
  - 全国電力開発計画  
1993.12 ~ 1995.10 マスタープラン
  - ハムトゥアン・ダム水力発電計画  
1994.06 ~ 1995.06 詳細設計  
1996.04 ~ 2005.04 入札評価、施工管理
  - ダイニン水力発電計画  
2001.05 ~ 2007.07 入札評価、施工管理
- 2000
  - ウォンビ石炭火力増設計画  
2001.11 ~ 2002.09 詳細設計
  - ニンビン石炭火力増設計画  
2005.02 ~ 2005.09 詳細設計
  - ソンラ水力計画詳細設計  
2005.03 ~ 2006.05 詳細設計
  - ソンラ水力発電計画機器調達業務  
2006.01 ~ 2007.07 詳細設計
  - タクモ水力増設計画  
2006.04 ~ 2018.10 詳細設計、  
国際競争入札支援および施工監理
  - 電力事業に係る技術基準および  
安全基準策定調査  
2006.05 ~ 2007.03 技術基準および安全基準策定
  - ソンラ水力発電計画  
2007.03 ~ 2011.08 施工監理
- 2010
  - **ギソン1火力発電所計画**  
2008.04 ~ 2018.08 詳細設計、  
国際入札支援および施工監理
  - バクアイ揚水発電計画  
2009.11 ~ 2012.01 フィジビリティ調査  
2015.11 ~ 2016.11 技術調査
  - ベトナム国電力技術基準普及プロジェクト  
(技プロ)  
2010.03 ~ 2013.07 各種基準作成
  - 超々臨界圧石炭火力発電計画  
2016.10 ~ 2017.06 フィジビリティ調査



1 ギソン1火力発電所の揚炭ベース。アンローダー（揚炭機）で運搬船から石炭を降ろす。 2 試運転時の打ち合わせ風景。無煙炭ゆえの問題が多発した。山田さんは写真右。 3 日本製のタービン、発電機。 4 貯炭場にはカマココのような屋根がある。 5 土木工事後の集合写真。前列右が山田さん。 6 建設中の発電所建屋。 7 フランス統治時代の教会。ニンビン省にあるファジエム大聖堂。 8 大小3000の奇岩群で有名なハロン湾。写真は中でも有名な闘鶏島。 9 発電所の食堂で。「ベトナム料理は日本人にも食べやすい」と山田さん。

### ベトナム国でのODAプロジェクト

Jパワーは、ベトナム国で1993年以降、水力発電や石炭火力発電など合わせて、これまでに全27件のコンサルティング事業を展開してきたが、今回はその中から「ギソン1火力発電所計画」について紹介する。

ギソン1火力発電所は、同国の首都ハノイ市から南西に約350kmに位置するタインホア省ギソン地区に計画された。ベトナム国は、1995年7月の米国との国交正常化以来、経済成長が加速、それに伴い、逼迫した電力問題を解消するため計画されたのが本プロジェクト。Jパワーはベトナム電力公社(EVN)からの依頼で、2001年に建設計画を立案、実施可能性調査などを行い、07年に日越円借款実施案件(ODA)として調印、08年にEVNとの間で技術的コンサルタント契約を締結した。本件に08年から関わった山田エズさん(現インドネシア BPP 出向中)に話を聞いた。

「ギソン地区には石油化学のコンビナートもあり、工業団地も造成される予定だったので、そのインフラ整備という意味もありました」

同発電所は、同国北部で産出する無煙炭を燃料とする、総出力60万kW(30万kW×2基)の発電所。無煙炭は、通常20%を超える石炭の揮発分が数%しかなく、技術的に燃焼が非常に難しい石炭だが、Jパワーは以前、同国の別案件での良好な実績があったことから、EVNの信頼が厚かった。

### 2年間の単身赴任も有意義に

Jパワーからは10人が数週間ごとに日本とベトナムを行き来する出張ベースで、業務に当たった。山田さんはプロジェクトマネジャー代理として、主に施工監理や運転支援などの業務を行った。コミュニケーションも良好で、工事工程も順調に進んでいたが、土木工事がほぼ完了し、機械電気工事が最盛期となった段階で品質管理・安全管理上での問題が多発、その対応に苦慮した。さらに試運転段階で、無煙炭を使用する上での問題の解決に時間を要したという。特に今回のコンサルティング契約(アドバイザー契約)では、直接現場に指示できず、契約当事者であるEVNを通じての作業にもどかしさはあったようだ。

これら安全の問題およびプロジェクトの状況に伴い、13年7月から15年7月までの約2年間、山田さんは単身現地に駐在することになった。

「ベトナムの人は親日的で、レストランで1人で食事をしていても、『一緒に食べましょう』と誘われたり、家に遊びに行くほど仲良くなった人もいます」

多くの友人ができ、2年があつという間だったと山田さんは語る。

その後ベトナムは、ASEANの中堅国として目覚ましい経済発展を遂げているが、その一助となったことは間違いない。

計・施工・保守。日本全体の電力系統の広域的運用に資するため、これまで任地も全国に及んだ。「送電の現場は人里離れた山間地と、住宅が密集する市街地とは作業条件がまったく違い、臨機応変の対応が求められます。各現場で得た経験知識、社内外の方々とつながりや地域との触れ合いから得たものが自分の血肉になっていると感じます」

文／内田孝 写真／齋藤泉 (5以外)

## 「送電線をつないでしっかり守る

### それがラインマンの矜持です。」

■ 電源開発送電ネットワーク株式会社 送電部 送電建設グループ 倉谷 和也

今年4月、電気事業法に定める法的分離に呼応し、電源開発送電ネットワーク株式会社はJパワーグループの送電事業を担う新会社としてリスタートした。「社名やロゴが変わって現場は気分一新。専門家集団として意思決定が素早く、ベクトルもはっきりした気がします。一方で、不断のエネルギー供給というJパワーグループの一員としての

使命に何ら変化はありません」

四半世紀に及ぶ社歴が送電一筋の倉谷和也さんは、新会社への思いをそう表現した。発電所と変電所をつなぐ送電設備や、本州と北海道・四国・九州をつなぐ地域間連系設備を舞台に、ライフラインを守る「ラインマン（送電線の建設と保守に係わる技術者）」の矜持がそこに見てとれる。主な職分は鉄塔や送電線などの設

現場を仕切り、チームの士気を高める立場になって思うことの1つは、

後進を育み、働きやすい職場環境を整えていくための方策だという。「人材難の中で施工力の維持継承を図ることは大きな課題。現場にドローンを持ち込み、鉄塔に登らず点検・検査ができるようなIoT技術も活用していければと考えています」



1 只見幹線の住宅密集地における鉄塔建替工事。停電作業で奥側の高い鉄塔（赤白塗装）を建てた後、手前の既設鉄塔（灰色塗装）を解体する。 2 送電線沿いや直下の土地利用が進む市街地では、様々な制約の中で工事用地を確保し、設計・工法等の工夫が求められる（只見幹線）。 3 高所作業に伴う墜落事故から身を守る送電用フルハーネス型安全帯を導入。 4 本州と九州をつなぐ関門連系線の電線張替工事（本州側より）。右手は関門橋。 5 十勝幹線での鉄塔高上工事。



建て替えを手がけた東京・府中市内の鉄塔前に立つ倉谷さん。ヘルメットには新会社のロゴが。

POWER PEOPLE

電源開発送電ネットワーク株式会社

# 世界が認める縫製技術 医療用ガウンで社会貢献

新型コロナの感染が増えた今年の3～4月、  
医療用ガウンの不足が問題となった。  
中国での生産に頼っていたため、輸入が止まってしまったのだ。  
緊急的に国内で生産が行われたが、  
それに協力した業界の1つが婦人服縫製業界だ。



ファッションしらいしが製造する医療用ガウン。左が不織布を使用した厚生労働省発注のもの。右は防水加工された布でつくられた「洗える」医療用ガウン。



簡単にヘルシーなスパイスカレーを日本中に

## スパイスカレー研究家 印度カレー子



いんどかりーこ  
スパイスカレー研究家。香林館株式会社代表取締役。1996年生まれ、宮城県出身。スパイスカレーセットの開発・販売やコンサルティングを行う。「ひとりふんのスパイスカレー」など9冊の著書がある。  
<https://indocurryko.net/>  
Twitter : @IndoCurryko

「カレー好きの姉のために、初めてスパイスカレーをつくった時、『料理経験が浅い私でもおいしくできた!』と感激しました。それがきっかけで作り始めたのです」

「日本では、カレーは煮込み料理というイメージですが、むしろ炒め料理だったんです」

「豊富だという。その魅力を伝えるために、カレー子さんはブログでレシピを公開するだけでなく、自らスパイスセットを考案し、その販売も開始。香林館株式会社という法人組織も設立した。現在、東京大学大学院でスパイスの研究に打ち込みつつ、新商品の開発に取り組んでいる。「スパイスカレーは私の運命。」

「人生が変わりました」というカレー子さん。スパイスカレーの道を究め、日本中に広めたいと語ってくれた。

取材・文／ひだいますみ 写真／竹見脩吾



腕のカーブに合わせて曲面処理が行われた袖の部分。縫う前のアイロン処理が着心地のよい服を生み出す。



同社では1台のミシンに1台のアイロンが設置されている。縫う前にミシンで布に曲面をつくる処理を行ってからミシンをかける。



有限会社ファッションしらいし  
代表取締役 白石正裕さん

## 医療崩壊を防ぐために 医療用ガウンの国内生産を

東京都杉並区の住宅街で、コロナ患者対応の医療用ガウンがつくられていると聞き、その工場を訪ねた。

お話ししてくださったのは有限会社ファッションしらいし 代表取締役の白石正裕さん。白石さんは、縫製業者による業界団体、日本アパレルソーイング工業組合連合会（以下、アパ工連）の副会長を務めており、今回のコロナ禍の中、アパ工連を主導し、厚生労働省からの依頼で医療用ガウンの生産を進めてきた。アパ工連では傘下の約60社が生産を担当、4月末までに4万5000着を納入し、10月末までに240万着を納入する予定だ。最初に医療用ガウンの生産について打診が

あったのは1月下旬、厚労省からではなく、所轄官庁である経済産業省からの打診だった。

当時白石さんは、新型コロナがこれほど大規模に感染するとは思っていなかった。

「我々のような婦人服の縫製工場ではなく、白衣などの工場のほうが向いているのではないかと話していました」

3月に入り、白石さんはパリコレから帰国し、テレビを見るとスペインで感染者が1万人以上というニュースが流れていた。

「これは大変なことになる、日本でも医療崩壊が起こるかもしれない」

と実感した白石さんはすぐに動き出す。経産省からの打診は保留になっていたため、アパ工連内をとりまとめ、医療用ガウンの製造を引き受けることを決める。さらに、知り合



東京の受験業界で定番となったファッションしらいしのお受験服。「ヌーヴ コンフィニ (nouveau confini)」というブランドで販売されている。

## 国内で減少する 縫製工場

ファッションしらいしは、1984年に白石さんが創業した縫製工場だ。主に、アパレルブランドの下請けとして高級婦人服の製造を行っている。

「縫製業界はバブル崩壊後に、工場の多くが中国や東南アジアなどに移転し、価格競争が激しくなりました。アパレルは、デザインを下請けに丸投げするだけで、製造段階での問題解決や、そのコストは下請けが負担するという構造です」

これでは下請けは赤字になってしまふ……。白石さんの奮闘により、同社に2つの大きな転機が訪れる。

1つは、オリジナル製品の販売。2000年頃からオリジナルブランドの開発に取り組んだのだ。オリジナルデザインのウエディングドレスや婦人服をつくり、大手百貨店に持ち込むが、採用には至らない。何度もチャレンジし、試作品の数は200着を超えた。

05年12月、新宿の大手百貨店で、不採用と言われた時のこと。

「ここで断られたら、もう営業には行けないというくらい精神的に追い込まれていた」

という白石さんは、

「だったら、あなたたちがつくってほしい服をつくります」

と言い放ってしまった。その時に百貨店のバイヤーから言われたのが「お受験服」だった。



トム・ブラウンのジャケット2様。右の模様は布を縫い合わせて表現されている。左は、ジャケットとスカートが縫い合わされたワンピースで奇抜なデザイン。

お受験服とは、私立の小中学校を受験する児童の母親が面接時に着るスーツだ。奇抜なデザインは必要なく、立っても座ってもきれいに見えることが何より重要だ。

「そういう婦人服は弊社の得意分野」と語る白石さん。「精密な服」、「性能のいい服」をポリシーに長年服づくりをやってきた。翌年、同社製品を店頭に並べると、百貨店の店員が不思議に思うほどによく売れた。同社の服を試着したお客さんは、そのまま購入する人が圧倒的だったのだ。

「弊社の服は着心地がいいんです。人体に合わせて立体的に仕上げる『クセ取り』などの

小説家

# 伊藤 朱里

いとう・あかり 1986年、静岡県生まれ。2015年、『変わらざる喜び』で第31回太宰治賞を受賞、同作を改題した『名前も呼べない』（筑摩書房）でデビュー。著書に『稽古とプラリネ』（筑摩書房）、『緑の花と赤い芝生』（中央公論新社）、『きみはだれかのどうでもいい人』（小学館）など。



あすまきひびこ『なつばとー』11巻より

## 「怒られたら あやまろう」

世間の正しさの前でもがく人々を描いた『名前も呼べない』（筑摩書房）、職場の女性同士の心模様を描いた『きみはだれかのどうでもいい人』（小学館）など、人それぞれの価値観や生き方を万華鏡のように鮮やかに描く作品で注目をされている小説家・伊藤朱里さん。上記の言葉を執筆用パソコンの画面に貼り付けて、勇気をもらっている。

「小説を書くとき、世の中に言葉を発信する責任を常に感じています。自分が選んだテーマやストーリー、描写や表現が誰かを傷つけてしまうかもしれないと思うと、筆が止まってしまうくらい怖くなります。そんな弱い自分を奮い立たせてくれる言葉なのです」

「怒られたら あやまろう」は、神社の栗を勝手に拾って怒られないのかと訊かれた際に登場人物の女子高生が答えたセリフだ。伊藤さんは、そのスパッと割り切った言葉から、いろいろ考えすぎて立ち止まってしまうのではなく、とにかく行動することが大切だと感じたという。

「もし自分の作品にまづいとところがあつて非難されたら、その時は心から『ごめんなさい』と謝ればいい。そう肚をくぐれば、書き続けられる気がします」

伊藤さんは、繊細に丁寧な言葉を選び、紡いでいく。自分の価値観や固定観念で他人を安易に判断したり、批判したりしていいのだろうか。自分にも「一方的な正義」を振りかざす加害者の側面があるのではないだろうか。日々、厳しく自分を見つめながら、小説を書いている。

自分の言動が他者に害をなしたのであれば、真摯に謝ればいい――。その考え方は、他者との関係に苦しむ人の心を慰め、勇気を与えてくれるだろう。「お守りの言葉」の1つとして心に留めておけば、いつか必ず役に立つ。



1. ロール状の不織布を切断する作業。医療用ガウン1着分は約3m。
2. 縫い上がった医療用ガウンを検品しながら手作業で1つずつひっくり返す。
3. 型紙に合わせて不織布を切り離す。細部はカッターで。
4. できあがった医療用ガウンを1着ずつ畳むのも手作業だ。
5. 医療用ガウンをミシンで縫う作業。1日に1人で50～60着を仕上げることができる。

加工をちゃんとやっている。こうした処理は昔からあるものですが、今のアパレル製品では省略されているんです」

クセ取りは、縫製時に布にアイロンをかけながら曲面をつくり、肩や胸のラインを美しくつくり出す作業。同社ではミシンで縫っている時間とアイロンをかけている時間がほぼ同じくらいなのだという。

同社のお受験服は、受験業界の定番となるまでに成長、同社に高い利益率をもたらす製品に成長した。

もう1つの転機が海外での展開だ。09年に米国ニューヨークの縫製工場に間借りし、スタッフ1人を派遣して現地の仕事を受け始めた。その工場にファッションブランドのトム・ブラウン (Tom Browne) が縫製を依頼していたことから、コネクションができた。

彼らは、しらいしの技術力を高く評価、11年には、しらいしのメンバーを中心に、試作品製作のための工房を現地につくった。日本ではデザイナーが現場に来ることはないが、米国では彼らも現場でともに働き、問題点をいっしょに解決していく。さらに、しらいしのスタッフにどうすればいいかというアイデアを求める。日本では、アイデアを出す「余計なことをした」と怒られたのに……。

「下請け」ではなく、対等なパートナーとして認めたのだ。

これ以降、しらいしでは、トム・ブラウンの縫製スタッフとして、ニューヨークのアトリエで働くほか、パリのコレクションにも同行している。

### 緊急時には業界をあげて 社会貢献に取り組み

お受験服は1人のスタッフが1日に2着縫い上げるのが精一杯だが、医療用ガウンは1人で50～60着は縫える。高い技術力が必要となる作業ではないし、利益もほとんどない。それでも彼らは日本の縫製工場として、全社をあげ、全力で取り組んだ。それは日本のために必要なことだと思ったからだ。

白石さんは今回の体験を次のように語る。「ものづくり産業や技術はどんな業界でも、国内からなくなっていくものはない。有事の時ほど、その存在の大切さがわかります」

縫製産業の人口は今、国内で16万人ほどに減少してしまっただが、白石さんは産業として持続可能なものにしていく努力が必要だと語る。そのために様々な計画を立てていったが、今回のコロナ禍で頓挫してしまった。計画の全貌は不明だが、コロナ禍が終息したら、「直売ショップや見学できる工場などにも取り組んでいきたい」と意欲的に話してくれた。コロナ禍の早期の終息を願うばかりである。

#### 有限会社ファッション・しらいし

1984年創業の高級婦人服の縫製工場。アパレルの下請けのほか、お受験服のオリジナルブランド「ヌーヴ コンフィニ」を展開。従業員数27名。社長の白石裕さんは、東京婦人子供縫製工業組合理事長、日本アパレルソーイング工業組合連合会副会長を兼任する。

<http://www.fashion.co.jp/>

## 苫前ウィンビラ発電所の更新工事開始について ～J-POWERグループ国内風力初の更新地点～

J-POWERの100%出資子会社の株式会社ジェイウインドは、今般「苫前ウィンビラ発電所」の更新工事を開始しました。

北海道苫前郡苫前町に所在する「苫前ウィンビラ発電所」は、J-POWERグループ初の商用風力発電設備です。我が国における大規模商用ウインドファームの草創期である2000年12月より運転を開始し、20年の長きにわたり営業運転して参りました。

今般、設備の高経年化を踏まえ、現在19基ある風車（単機出力1,650kWおよび1,500kW）を、国内最大級の風車（単機出力4,300kW）8基に建て替えることとしたものです。

今回の建て替えに際し、過去20年の運転実績も踏まえ、新型の大型機器導入に伴う性能向上をはかり、当地における風資源を最大限有効活用することとしております。

今後は、2022年12月の営業運転開始

を目指し、地元の皆様および関係各所のご理解・ご協力をいただきながら、環境保全に十分に配慮し、安全第一で工事を進めてまいります。

今年で、J-POWERグループにおける風力発電事業は、初号地点の運転開始から20周年となります。これまでの各地における実績を踏まえ、今後も高経年化の進んだ地点の設備を順次更新することにより、風力発電をはじめとした再生可能エネルギーの持続的な供給に取り組んでいきます。



苫前ウィンビラ発電所

発電所概要	
発電所名	苫前ウィンビラ発電所
所在地	北海道苫前郡苫前町
出力	30,600kW（シーメンスガメサ製（定格出力4,300kW）× 8基） ※現苫前ウィンビラ発電所と同出力
工程	2020年 8月 着工 2022年12月 営業運転開始（予定）

事業会社概要	
会社名	株式会社ジェイウインド
本店所在地	東京都中央区
資本金	1億円 （J-POWER100%出資子会社）
代表取締役	森本 成（J-POWER 再生可能エネルギー本部 風力事業部長）



位置図

## 鹿島パワー株式会社 鹿島火力発電所2号機の営業運転開始について ～日本製鉄株式会社との共同出資による最新鋭石炭火力発電所～

J-POWERおよび日本製鉄株式会社の共同出資により設立した鹿島パワー株式会社は、2016年11月1日より「鹿島火力発電所2号機」の建設工事を進めてまいりましたが、2020年7月1日に営業運転を開始いたしました。

本発電所は、高効率発電技術である

発電所概要	
名称	鹿島火力発電所2号機
所在地	茨城県鹿嶋市光3番地 （日本製鉄株式会社 東日本製鉄所鹿島地区構内）
出力	64.5万kW（発電端）
使用燃料	石炭
発電方式	超々臨界圧（USC）微粉炭火力

超々臨界圧（USC）発電を導入し、環境設備を適切に配置することで、地域社会への環境負荷低減を図っております。

J-POWERは、これからも高効率石炭

火力を有効に活用し、脱CO<sub>2</sub>に挑戦しながら、我が国のエネルギーセキュリティの確保と気候変動問題の解決に貢献していきます。



鹿島火力発電所2号機全景



こじま なお  
東京都出身。NHK Eテレ「NHK短歌」選者。2004年、角川短歌賞受賞。2007年、第一歌集『乱反射』により現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞受賞。2020年4月、第三歌集『展覧館』刊行。居合道二段。

## 「音のソノリティ」を詠む

— 大水車の音風景 —  
（埼玉県寄居町）

歌人 小島 なお



老朽化により2019年2月より解体工事を行い、新しい水車で再び日本一に。

写真：おはぎさん / PIXTA

回りゆく水車は水の物語その輪の向こう青い秋の空

「音のソノリティ」第792回放映（大水車の音風景）を観て詠んでいただいたものです。J-POWERグループは埼玉県川越市で、南川越変電所を運営しています。

高く運ばれてゆく。

埼玉県寄居町、「埼玉県立川の博物館」の敷地にそびえる大水車。直径は24・2mで日本一の大きさを誇る木製水車だ。老朽化のために建て替えられ、2019年7月に完成したばかり。観覧車と見紛うような巨大な骨組みには同じ県内の飯能産のヒノキ材が使われている。規則正しく組み合わされた構造の美しさと、木のあたたかみを感じられる同館のシンボルである。

一級河川の荒川が流れるこの地域にはかつて生活や農作業を支えた水車が多く見られたという。当時、実際に使われていたコンニャク水車と精米水車も移築復元されている。

大きな空を背景に大きな水車が回る。人と水との長い物語はこれからも続いてゆく。

※「音のソノリティ」第792回放映（大水車の音風景）を観て詠んでいただいたものです。J-POWERグループは埼玉県川越市で、南川越変電所を運営しています。

世界でたった一つの音  
音のソノリティ

J-POWERは、首都圏などで放送中のミニ枠テレビ番組「音のソノリティ～世界でたった一つの音～」を提供しています。「ソノリティ」とは、フランス語の音楽用語で「鳴り響き」の意味。日本の自然風景から、その場所できくことのできない音を紹介しています。

日本テレビ系列  
毎週日曜日 20:54～など  
BS日テレ  
毎週水曜日 20:54～（再放送）

## 秋田県沖の洋上風力発電事業開発に向けたコンソーシアムの組成について

J-POWER、株式会社JERA、ノルウェーのエクイノール社 (Equinor ASA) は、「秋田県能代市、三種町および男鹿市沖」ならびに「秋田県由利本荘市沖」における洋上風力発電事業の応札に向けコンソーシアムを組成しました。本コンソーシアムは、今後、本海域で予定されている再エネ海域利用法<sup>※</sup>に基づく公募に応札し、秋田県沖における洋上風力発電事業の実施を目指してまいります。

J-POWERは、国内第2位の規模を誇る合計出力約53万キロワットの風力発電設備を有しており、秋田県内（にかほ市、由利本荘市）でも長期にわたり陸上風力

発電所を運営してまいりました。また、洋上風力発電事業では北九州市沖洋上風力発電実証設備の建設・運営ならびに撤去を行うとともに、同地区港湾区域における洋上風力発電事業の公募において優先交渉権者に選定されており、さらに英国トライトン・ノール洋上風力発電事業に参画し、最先端の欧州の建設、運営に関わる知見を蓄積しているところです。

今後は、それぞれが有すノウハウや強みを持ち寄ることで相乗効果を発揮し、十分な実力と実績を有すコンソーシアムとして、長期的、安定的かつ効率的な、



本コンソーシアムが事業化を目指している促進区域

世界的にもトップレベルの洋上風力発電事業の実現を目指していきます。

<sup>※</sup>海洋再生可能エネルギー発電設備の整備に係る海域の利用の促進に関する法律

## FTSE Russell社のESG投資指数構成銘柄への選定について

J-POWERは、このたびESG (Environment「環境」、Social「社会」、Governance「ガバナンス」) 投資に関する代表的な指数である「FTSE4Good Index Series」および「FTSE Blossom Japan Index」の構成銘柄に選定されました。

これらのESG指数は世界的な指数開発会社であるFTSE Russell社が開発し

たもので、ESGについて優れた対応を行っている企業を構成銘柄としており、「FTSE4Good Index Series」は全世界の企業から、「FTSE Blossom Japan Index」は日本企業から構成されています。

これらのESG指数はサステナブル投資や様々な金融商品の作成・評価に広く利用されており、日本の公的年金資金を運

用する年金積立金管理運用独立行政法人 (GPIF) もその一部資金の運用にあたって「FTSE Blossom Japan Index」を採用しています。

FTSE Russell社の評価はコーポレートガバナンス、健康と安全性、腐敗防止、気候変動といった分野について行われており、これらESG指数の構成銘柄である企業は、環境、社会、ガバナンスに関する高い基準を満たしていると言えます。

## 読者プレゼント

「Power of Words 私の好きな言葉」に登場いただいた小説家・伊藤朱里さんの著書『きみはだれかのどうでもいい人』(小学館) (伊藤朱里さんのサイン入り) をプレゼントします(ご応募いただいた方から抽選で3名様。お1人様1冊まで)。同じ職場で働く、年齢も立場も異なる4人の女性たちの目に映る景色を描いた物語。職場での人間関係にもやもやする自分を変えてくれる新感覚同僚小説です。

### 応募方法

郵便ハガキに、①郵便番号 ②住所 ③氏名 ④本誌のご感想を明記の上、下記住所「J-POWER『グローバルエッジ』編集室」宛てに2020年12月7日(月)(消印有効)までにご応募ください。なお、当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。個人情報、プレゼントの発送のためにのみ使用させていただきます。



## 米国テキサス州で2地点目の太陽光発電開発への着手について

J-POWERは2020年8月、米国現地法人J-POWER USA Development Co., Ltd. (以下、JPUSA) を通じて、米国テキサス州において2地点目となる太陽光発電プロジェクト(交流出力40万kW)の開発に着手しました。本プロジェクトの工事着工は2021年後半、運転開始は2023年を見込んでいます。

本プロジェクトはJPUSAが太陽光開

発デベロッパーであるAP Solar社 (APソーラー、本社：米国テキサス州) と共同で開発するもので、J-POWERにとって米国ではテキサス州Wharton

(ウォートン) 地点(交流出力35万kW)に次いで2地点目となる再生可能エネルギープロジェクトです。2地点合計交流出力は75万kWです。



プロジェクト位置図

プロジェクト概要	
所在地域	Refugio地点：ヒューストン市の南西約200km (レフュージオ)
出力見込	40万kW (交流)
建設開始見込	2021年後半
運転開始見込	2023年

## オーストラリア国Genex社との株式引受契約の締結について ～海外の再生可能エネルギーの導入拡大に向けて～

J-POWERは、オーストラリア国(以下、豪州)の再生可能エネルギー企業Genex Power Limited社(ジェネックス パワーリミテッド、以下、Genex社)との間で、株式引受契約を締結しました。

Genex社は、豪州において、太陽光発電所の開発・建設・運転保守を行い、また揚水発電所の建設準備に取り組んでいます。さらに、風力発電所の開発も計画しています。

豪州は、再生可能エネルギー資源が豊富であるため、今後再生可能エネルギーが増えるとともに、その調整・貯蔵のニーズが高まるが見込まれています。現在、J-POWERは、国内外の再生可能エネルギーの導入拡大に取り組んでおり、Genex社への出資を通じて、豪州においても再生可能エネルギーに参入します。

また、J-POWERは、Genex社との間

で締結した技術支援契約に基づき、J-POWERが国内で培った揚水発電所に関する知見を活かし、Genex社による揚水発電所の建設・運営をサポートしていきます。

これからもJ-POWERは、再生可能エネルギーをはじめとした海外発電事業の更なる拡大に取り組んでいきます。



Genex社の概要	
名称	Genex Power Limited
本社	オーストラリア国シドニー市
概要	オーストラリア証券取引所に上場している再生可能エネルギー事業者
プロジェクト	下記の5プロジェクト、総出力77万kW

Genex社の5プロジェクト(総出力77万kW)			
プロジェクト	発電方式	出力	ステータス
① Kidston Stage 1 (KS1) (キッドストン ステージ1)	太陽光	5万kW	運転中
② K2-Hydro (K2H) (ケーツー ハイドロ)	揚水	25万kW	建設準備中
③ K2-Solar (K2S) (ケーツー ソーラー)	太陽光	27万kW	開発中
④ Kidston Stage 3 (K3W) (キッドストン ステージ3)	風力	15万kW	開発中
⑤ Jemalong Solar (JSP) (ジェマロン ソーラー)	太陽光	5万kW	建設中

<sup>※</sup>Genex社への出資を通じて、今後、豪州の5プロジェクト(上表)に加え、海外での再生可能エネルギープロジェクトの更なる開発に取り組んでいきます。

